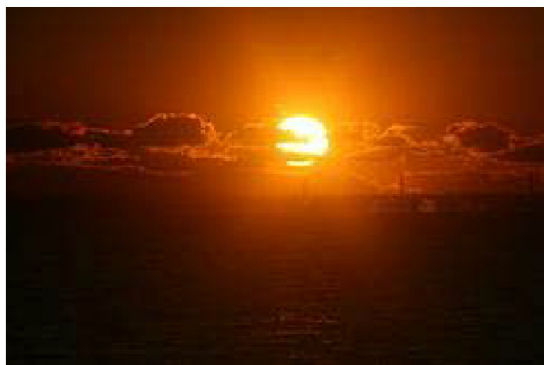


161号

謹賀新年



本年もよろしきお願い申し上げます

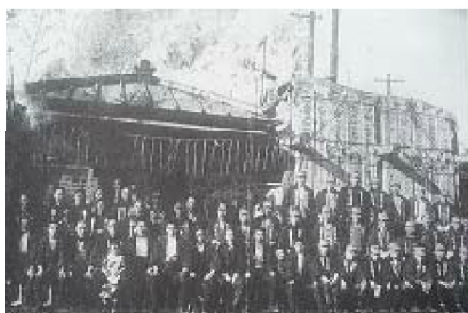
### 羽前小松から集荷

カネ東では杉の板割、タルキ、松の平角などを製材し始めた。製品も種類が多くなり忙しくなった。茨城から坂場を含め2名、伊東雄次、白井覚一、紺谷義雄などが入店した。昭和10年から東北近県材を手掛け、伊藤倉蔵氏と知り合い東北支店長として処遇した。集荷した丸太は羽前小松駅に集め、細田正三氏が検尺に赴いた。このときの宿が米屋旅館菊地昭一郎氏（義兄）の実家である。

### 平野町に引っ越す

昭和14年4月住まいを平野町引っ越した。大田堀と運河と中州三方に囲まれた行きどまりである。元銘木市場、今は、木場公園の西の端で三つ目通りよりのテニスコートのあたりである。二階建て、4寸五分、柱、間口の広い大きな家であった。カネ東は、ここを住居兼店とした。帳面は毎日リヤカーで千石の工場まで運び、夜持ち帰って夜遅くまで帳面をつけた。なにかと不便の為、昭和15年には、千石町の工場のなかに住まいと店を建て本拠地とした。工場と店、そして住まいが一つ場所、いよいよ、カネ東細田三郎製材所として、本格的な事業が始まった。

家庭では、昭和九年に二男徳治（昭和11年に死亡）11年に弟孝治、14年に妹の愛子、17年に弟悌治（現社長）がそれぞれ誕生した。



木原造林のお世話で大量集荷

昭和12年日支事変が勃発、世の中すべてが軍事優先となり、カネ東が能代木材から購入した約千石の丸太が、貨車不足の為羽後境駅止められ困惑した。何とかできぬかと、秋田の鉄道管理局に泣きつき急場をしのいだ。

この経験から、自分だけの集荷では丸太を集めきれないと判断、どなたか有力業者をお願いしなければならぬことになった。

集荷難に加えて、商いは、丸太の仕入れは現金、販売は手形売りの為に、現金の立て替えが発生し、ここ一番丸太の大量集荷ができず商いが制約されていた。

父は、ここで不屈の闘魂から、知恵を巡らし木原造林さんをお願いした。父の、真面目な人柄と商売熱心さを見込んで、応援して下さることになった。二つの難題を解決した。正に「鬼に金棒」当時の優良な産地として名だたる日光赤小名山の丸太を、全量引き受けさせて頂いた。

大量の丸太を積んだ貨車は、日通隅田川駅、業平駅、小名木川駅などの貯木堀は、カネ東の丸太で満杯となり、次々と大横川カネ東河岸に廻送した。ここで新しい心配は、水上警察との折衝となるほど満杯の盛況であった。

カネ東細田三郎製材所は、木場うちの同業者から、一目も二目も置かれる存在となった。これも不屈の精神からの成功である。この頃がカネ東の第一次全盛期父も木場の旦那として、木場内はもちろんのこと、東京中を飛び歩く実業家として、大活躍した。何事も窮すれば通ずである。 続く

フィリピンで大怪我が命拾い

昭和16年大東亜戦争即ち第二次世界大戦が勃発した。昭和17年統制となり、東京の木材業者は、工場所有業者以外はすべて廃業となった。カネ東も製材工場所有のため存続を許されたが、細田三郎本人は、軍による統制会社日本木材株式会社の嘱託をとして、フィリピンの製材工場の再建を命じられ、番頭臼井覚一を手許としてフィリピンに渡った。

製材工場は、中国人の経営で、製材工員雑役を含めて1,000人いる大工場が数工場あり、製材品を現地の軍に納入していた。しかし、さっぱり能率が上がり非効率な工場であった。そこで、この工場再建には、木場一番の働き者であり、工場経営に優れた手腕の持ち主、カネ東の細田三郎に任せようと白羽の矢がたったのである。



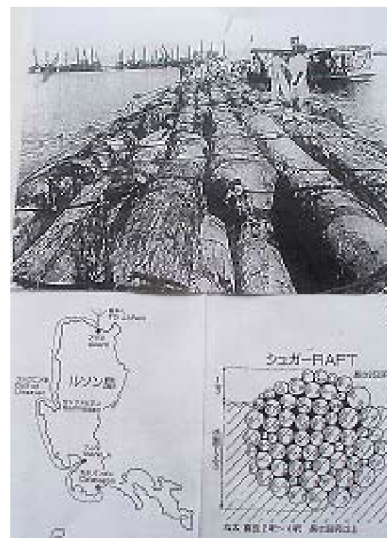
日本社の事務所長は、檜森鎌三氏、事業所長は、平野利一氏であった。事業地はルソン島のカタンバンカン、アパリなどの数か所であった。約一年間のあいだ細田三郎は寝食を忘れて、カネ東精神で工場の経営にあたり、日本流の工場に作り直したのである。ところがここで大変なことが起こった。

マニラ北東部に新たに事業所建設計画があり、現地視察の為檜森氏を隊長として、2台のトラックに分乗、ゲリラ警戒の為護衛部隊に守られ出発したが、細田三郎が乗ったトラックが山道で横転した。臼井覚一は軽傷、細田三郎は重傷、運転手死亡する重大事故であった。現地で入院回復後日本へ送り返された。

結果的にこの事故が細田三郎を救った。このあと、戦況の激化により、檜森氏も戦死、臼井覚一氏も日本へかえる船が、撃沈され戦死した。 続く

## 海洋筏

本土防衛のため木材資源を確保せよ、海洋筏を作り日本本国へ回漕せよ、軍の命令が下った。当時軍の命令は、絶対的で逆らえない、そこで無謀ともいえる計画だが実行することになった。この話は、細田三郎の日本社フィリピン時代の同僚高尾鶴三郎氏よりの聞き書きである。貴重な写真もお貸し頂いたものだ。海洋筏の仕組みは、浮き丸太をワイヤーで一本ずつまわして、仮止め固定、更に長いワイヤーで止めながら増やしていく、全長は250フィートにもなった。その上に、ワイヤーをゆるめながら、ラワンなどの浮き丸太、アピトンなどの沈む丸太を問わず構わず積み上げていく、重みで下の丸太は水面下に沈むこの方式で、筏がどんどん大きくなり全体の構成が、三分の二が水面下になる。全体にワイヤーを幾重にもまわし、締めあげて又カンで固定する、長手は一方向揃えてあるので、巨大な葉巻のような格好になる。この海洋筏をシガーラフトと名づけた。ワイヤーは5トン使用した。この仕事は最初から最後まで全て自分が考案し作り上げた。この海洋筏をルソン島中部のカタンバンガンからマニラまで250カイリを400トンの船で曳航した。この当時ではこんな大きな海洋筏を、しかも250カイリの外洋を曳航したのは世界でも最初である。昭和18年シガーラフト外洋筏は、当時内地の新聞でも報じられた快挙であった。マニラでシガーラフトを解体し、平筏に組みなおした丸太に溝をほりワイヤーで締めあげ頑丈に筏組し、マニラからルソン北端のアパリまで船で曳航した。アパリ沖で、筏に電気をつけ日本に向け放流した。この筏は残念ながらいまだに行くえ不明だ。しかし、今にして思えば風船爆弾より確率の低い海洋筏を作り上げ、日本へ向けて放流した、こんなことがよくできたと、吾ながら思う。人間やろうと思えば大抵なことはできるのではないか。船での曳航なら成功していたのではないか。戦後ソ連材を巨大な海洋筏で、日本海を曳航した時代があったので、不可能ではないと今でも信じている。



以上は高尾鶴三郎氏より

## 東京大空襲

昭和20年3月10日、米軍B29爆撃機から約32万発の焼夷弾が雨のごとく降り注いだ。

いわゆる下町、深川、本所、向島など隅田川と江戸川のデルタ地帯は、地獄絵の火の海となり、一夜にして10万人以上の尊い命が奪われた。

これが世に言う「東京空襲」である。

厳父細田三郎は、「工場は一人で守る」と全員を避難させ、消火に努めたが猛烈な火勢に抗しきれず、やむを得ず退避、豊住町の海軍堀（現在のイースト21）に、首まで浸かって、九死に一生を得た。

命は助かったが、工場も家も全焼し、すべては灰塵に帰した。

この大空襲で、実兄であり、ご主人にあたる角東の伊東主税氏ご夫妻と娘さんも亡くなられた。

我が家では、母静子、妹の愛子、弟の孝治、悌治の4人は、豊住町にある下水処理場のポンプ室に（現在は、角丸所有のイタリア料理店）避難し助かった。

このような大惨事後、厳父細田三郎は、わずか3カ月後の7月、バラックながら木場うちで、一番に工場を再開する快挙を成し遂げた。

「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」陛下玉音放送のわずか1カ月前であった。

電機もない機械も丸焼け、どうしたら製材機を動かすことができるか？

何とかして工場を動かし、家を作る木材、しかも板を作って雨露をしのぐ家を作る木材を提供したい、何とかして御役に立ちたい、

この一心から、今では考えられないような知恵を使って工場を動かした。機械を回したのである。

続く



焼け野が原から3カ月木場で一番に工場再開

その知恵とは、河川に、空襲でまる焼けになったポンポン船が沈没している。ポンポン船とは、ポンポンと音を出す焼玉エンジンである。当時木場の川並み衆は、このポンポン船を足代わりに、あるいは筏を



引っ張る曳き船としていた。川並み衆即ち、筏師の大事な船である。この船が沈没している。この焼玉エンジンを、モーター代わり動かし動力にできぬか、と考えて早速引っ張り上げ、分解しアラ油でさび落として、軽油を上野のヤミ市から調達して燃料とした。エンジンの始動は、ひもで引っ張り始動させる方式だ、最初はなかなか、かからなかったが、洗い直したり、色々調節して、何とかしなければ、という執念が実りエンジンがかかった。ここまでくれば、後は、鋸だ、焼けて、鈍った丸鋸に焼きを入れ直し、叩いて狂いをとり、アサリをつけなおす、当時は振り分けアサリであった。次に手やすりで、目タテし、何とか一人前の、丸鋸ができた。エンジンと鋸の連結は平プーリーをいくつも平ベルトで組み合わせ、力を強くし、丸鋸とつないだ。丸鋸は、ぶれながら、いびつに回った。回ればしめたもので、焼けボックイを、挽いてみると、曲がりながら、板に挽けた。家はバラックとはいえ、掘立柱を四隅にたてる、中角で、梁など横物を組み、小角を屋根周りに、打ちつけ、構造体の完成だ。しかし、これだけでは、バラックにならない。さらに板が必要だ。床をひき、壁を巡らし、屋根を張ることが、風を防ぐ重要な役割だ。板なくして、バラックはできない、バラック建てに限らず、住まいを作るには、板が必要である。戦後の復興は、細田のたゆまぬ知恵と、何がなんでもやりとおす精神が、深川木場で一番に工場を動かしたことにつながり、結果的に、焼け野が原からの東京の復興に大いに貢献したのである。このことが、日本放送協会の労働の時間に放送されたことは、知る人ぞ知る快挙である。ところが、この事実を信ずる人は少ないのが残念だ。しかし、厳父細田三郎が、焼け野が原から、東京の復興に力を尽くした事実が変わりない。 続く

株式会社設立・法人化を契機に木材の総合メーカーへ

戦後の焼け野が原から、やっと落ち着いたと思う頃、創業者細田三郎は、無理が続いたため健康を害し、東大病院の名医大槻先生の執刀で、胃袋半分切除した。

手術後健康回復し、昭和23年6月1日に、個人経営のカネ東 細田三郎製材所から、HMK、細田木材工業株式会社に改組、名実ともに、会社としてスタート、単なる製材業から、木工、そして人工乾燥まで、一貫生産可能の木材の総合メーカーとしての、第一歩を踏み出したのである。



細田三郎は、東京製材林産組合の筆頭副理事長に就任、理事長野沢 栄の片腕として、自分の為より、世の中のためにと、活躍した。

当時は物資の不足で、原木も割り当て切符の発券など経済の統制が厳しかったが、一方では、復興需要を間に合わせるために、自由取引いわゆる・・・が公然と行われたのも時代の要請である。もし、この自由取引なかりせば、東京の復興も、進まなかったのではないか。

ここでの教訓は、自分のためより、世の中のための精神である。また、時代に合わぬ理不尽な、しかも強制的な規制は、必ず無視され長続きしない。続く



靴磨きの少年

戦後間もないころ、仕事、家、食べものも何も無い不景気の世の中、進駐軍のある軍医が、靴磨きの少年との会話のなかで「君は幾つ」「7歳です」「お昼ご飯は食べたの」「食べていない」「君おなかが空いているでしょう。可哀相だ、これを食べなさい」とパン与えた。

少年は「有難う」と受け取ったが食べようとしな  
い「何故食べないの」と聞くと、「家に5歳の妹が待っ  
ているこれは妹に食べさせる」と言って、カバンに丁  
寧にしまいこんだ。



このとき、軍医は、「この国は、今戦争に負けて苦  
しんでいるが、必ず復興してくる、将来を担う立派な  
少年が居る、必ず世界の大国になる」と思った。

軍医の予想通り、焼け野が原のゼロから出発した日本は、世界で二番目の経済大国に  
なった。今回のアメリカ発 100 年に一度の危機などと大げさに騒いでいるが、戦後のこと  
を考え、靴磨きの少年のことを思えば、100 年に、一度などと、怯えていることは無い。

靴磨きの少年のような、気概と根性をもって、この危機に立ち向かうことだ。戦後の  
わが社も正に、ゼロからの出発で、今日がある。戦後焼け野が原からの出発の精神に戻っ  
て頑張りましょう。

これが、が正に、創業の精神である。わが社は、新木場で一番に、今回の危機を突破する  
ことが出来ると確信している。

## 170号細田の歴史—20

### 自分のためより皆の為

法人に改組後、病も完治した創業者細田三郎は、独特の、智恵と粘りと商魂で事業を広げた。

昭和24年12月、日本橋高島屋で、木の文化紹介と銘打ち、造林、伐採、運搬、製材、出荷までの全国木材業者を網羅した木材文化展示会を開催した。

木場からは、細田三郎の呼びかけで、細田製材、中川製材、不二振興が板割、柱、貫、垂木などを展示した。中川製材の製品が新聞に載らず、トラブルになったが、細田三郎の仲介で無事に収めた、

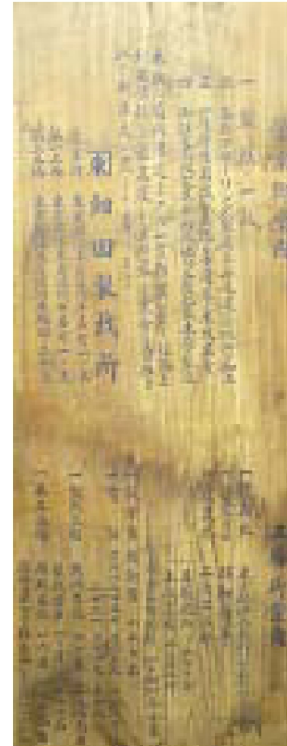
自分よりも皆のため、最初から最後まで面倒を見た。「オレが、オレが」はなく己の信じる道を歩んだ人間だ。

常に新しい感覚での経営、大福帳から「正式会計帳簿」へ、人情の機微を知り「人事管理も万全」、唯一の欠点は、壮年期の健康管理が、うまくいかず早死にした。会社は親父の健康と、会社の経理が健康ならば会社発展間違いなしだ。健康にはくれぐれも注意しなさい。

これは、日刊木材新聞社社長山口安二氏よりお聞きしたことである。

跡を継いだ我々は、智恵と粘りと商魂引きを継ぎ、そして健康管理にも万全を期し、私は親の歳を10年超え喜寿77歳いたって元気である。

今回の、リーマンショック、そしてデフレ不況と続き、業界苦しんでいるが、創業者細田三郎が、敗戦の焼け野が原、ゼロからの出発を考えればなんでもないことである。全社一丸総力を挙げて、この危機を乗り切ることを宣言する。



171号 細田通信

東京湾岸署では奇跡が起きつつある。平成21年警視庁管内で交通死亡事故ゼロを達成し、ベストワン表彰を受けた。これが一度目の奇跡だ。

しかし昨年は、交通事故多発で管内ワーストワンの不名誉な記録を作ってしまった。

一年でベストワンからワーストワン、前例のないこと。これが二度目の奇跡だ。

今年は不名誉を挽回と、安全指導、取り締まりの強化半年間事故死ゼロの記録を達成、表彰を受けた。これは素晴らしいことだ。10月10日で一年間の無事故記録が達成できる。あと4カ月あまりでゼロ記録達成すれば、前例のない記録となり正に三度目の奇跡が起きる。



東日本大震災で落ち込んでいる。しかし日本人は、明治維新、関東大震災、敗戦から直ち奇跡を三度起こした。

日本人のもつ活力により今回も必ず乗り越え復興する。

「湾岸署ゼロ」を日本経済の復興とすれば、全力を尽くさねばならない。

奇跡は、「なせばなる」である。安全運動の出陣式は、殺気立つような緊張感のなかで行われ署長訓示に続く白バイ隊員から

「死亡事故は起こさない」

「起こしてたまるか」

「起こすものか」

「事故はゼロ」の宣言であった。このように気合が入れば事故など起きるはずがない。

「奇跡は起きる。なせば成る」御協力を。

品質第一にをモットーとする

細田木材は、昭和6年11月3日個人創業、昭和23年6月1日株式会社に改組し、会社として設立しました。以来、創業者の強いリーダーシップと、全社員の一致協力により、幾多の困難を乗り越え、今日を迎えることが出来ました。これも、創業以来今日まで、全力を尽くして頂いたかたがたのお蔭様と、心より感謝申し上げる次第で御座います。先日心ばかりの祝賀会の席上、加藤東吾氏、政本卓次氏より、戦後焼け野が原の東京復興に、創業者の強い意志のもと、細田木材が果たした役割についてのお話を伺いました。昭和21年本建築工場を建設し、昭和51年新工場移転まで、この工場で操業することが出来た。信条の第三条「品質第一にをモットーとする」しっかりしたものを作らねばならない、信条の精神がここでも読み取れました。また、木材の欠点除去のため、木材乾燥が必要として、東京で一番に木材乾燥工場を設立した。このお話から一貫して流れる細田木材の精神は、信条の第三項、「品質は大切に」の精神であります。いまや、100年に一度の危機であります。この危機を乗り越えるには、創業以来の精神、「品質第一に」であります。この精神を大切に更なる88年、99年、100年に向かって前進しましょう。

## 172 号細田の歴史—22

### 住宅遂に 100 万戸

#### カポールの本実下見板

住宅着工数はうなぎ上りに増え続け、昭和42年には、遂に104万戸となり大台に乗った。40年代平均は132万戸、1戸あたりの面積は76m<sup>2</sup>となった。当時の住宅の外壁に使われている下見板は、杉の板割りで、南京下見板（一枚の板から二枚とる長押挽きと同じ製材法）の全盛時代だが、供給が間に合わず、思いつきでラワンではということになった、一本の丸太の側面でしか製材しないラワン羽目板のみでは、間に合わない、ほかにまとまって作れる丸太を探そうということで見つけたのが、カポールという木だ。ラワンと同じく南洋材だが、硬く密度高く従って比重も高い、水面では、90%が沈木、所謂「しもり丸太」自動車のボデー材が主な用途だ。ところが、これが虫の好きな香りが強く、全面ベタピンの丸太が殆ど、しかも虫食い跡が真っ黒に変色し、輸入商社は持て余し、処分に困っていた。通常ピンホール材の用途は、家具の芯材など、見えないところに使われているが、カポールは、比重が高く「しもり丸太」のために、製品にしてからも、重くて使えず、困っていた。このカポールを使って、4寸の3分3厘で南京下見の改良品を作った。この製材が大変だったが、細田木材の技術で挽きこなした。このカポールの下見板は、釘のみえぬ「本ざね加工板」お洒落で現代風の外壁として、評判がよく生産が追いつかぬほどの人気であった。創意工夫と何事のも恐れぬ、チャレンジ精神、そしてなせば成るの実行力を学んで欲しい。続く